

戦後ユース・サブカルチャーズについて(1)：太陽族からみゆき族へ*

難 波 功 士**

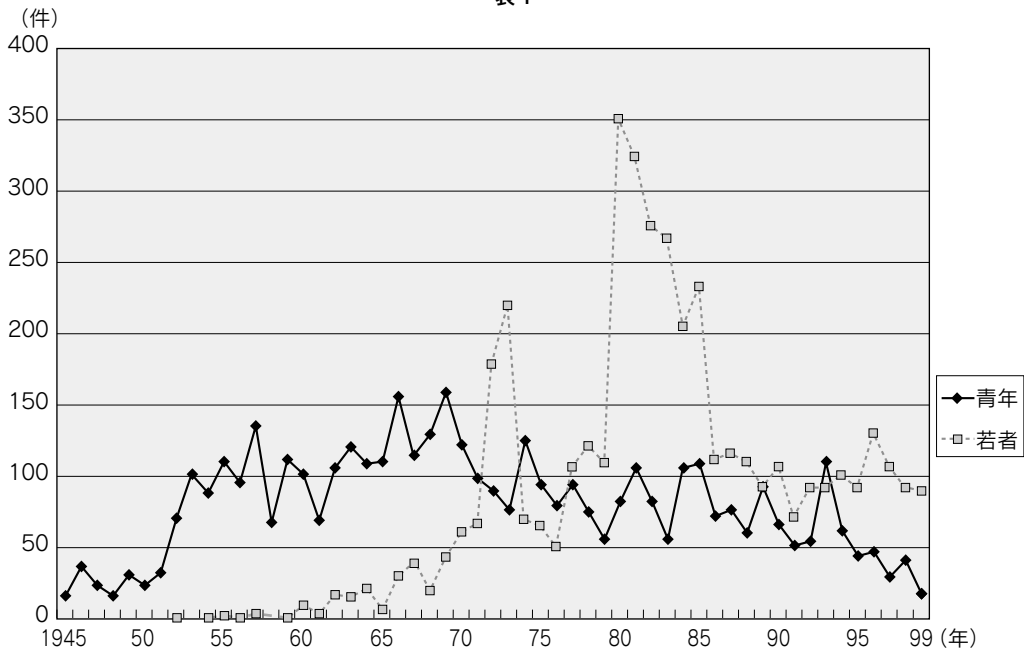
【0】「青年」から「若者」へ

かつて「青年」が、特定の歴史的・社会的な文脈の中で、固有の意味をもつ言葉であったことは、すでに多くの論者が指摘している(中山, 1956; 佐藤, 1970; 池谷・小池, 1994; 北村, 1998; 木村, 1998; 北河, 2000; 多仁, 2003)。旧弊な「若衆」「若者」に対し、明治の青年たちは、それこそ青雲の志を抱き、政治的・社会的な変革の担い手であろうとした。だが、戦後日本社会において、徐々に青年は、単なる一定の年齢層を指す言

葉へと化していく。青年団に組織される人員は減少し、1990年には「青年の主張」は「青春メッセージ」へと名称を変更している。朝日新聞の見出しを見ても、そこに現れる青年の語は、戦後を通じてほぼ一定ないし漸減を続けている(表1)。一方「若者」は、60年代に出現し、70~80年代に頻出している¹⁾。また70年頃を境に、「青年文化」から「若者文化」という用語の転換も起こっている。

こうした推移の背景には、いわゆるベビーブーマー(日本においては団塊の世代)を母体ないし震源とした60年代の「大文字の若者文化(Youth

表1



*キーワード：ユース・サブカルチャー、太陽族、みゆき族

**関西学院大学社会学部助教授

1) 英語圏における adolescence 概念は青年と、また youth は若者と近似した関係にある (Gillis, 1981=1985)。また朝日新聞の見出しにおいて、若者の意での「ヤング」が登場したのも66年以降のことである。

Culture) —— 大人文化や、他者からの押しつけである青年文化からの離脱、ないしはそれへの抵抗——の爆発がある。その一種快楽主義的な雰囲気は、それまでの刻苦勉勵を旨とする青年概念にはなじまないものであった。以前拙稿において、そうした若者文化には、その当初から多くの分派(clique)が内包されており、それら「ユース・サブカルチャーズ」の並立・拮抗という事態が、今日まで続いていることを論じた(難波, 2003)。本稿では引き続き、戦後日本社会におけるユース・サブカルチャーの変遷とその社会的含意を考察していくわけだが、その出発点として、前稿で挙げた10のユース・サブカルチャーズのうち、ここではまず「太陽族」と「みゆき族」をとりあげ、50年代から60年代にかけての状況を概観しておきたい。

【1】太陽族の季節

「族」の源流

75年9月9日号『週刊プレイボーイ』の記事「ヤング・ライフの開拓者《〇〇族》にみる戦後30年」によれば、太宰治の『斜陽』から派生した斜陽族(48年)を皮切りに、パチンコブームの際の親指族(51年)を経て、ミーハーの上をいくソーラー族(54年)が登場したとある。また、若者風俗史・ファッション史に関する著作の多くは、50年頃の「アプレ族(アプレ・ゲール=戦後派)」に言及し、アメリカ文化の圧倒的な影響力を指摘している(アクロス編集室, 1995)。そのアメリカのティーンエイジ・カルチャーの世界的な広がり——55年の映画『エデンの東』『理由なき反抗』封切りによるジェームス・ディーン人気や、同年の『暴力教室』の挿入曲“ロック・アラウンド・ザ・クロック”のヒットなど——と呼応するように、50年代には日本においても「十代」が取り沙汰され始める²⁾。

たとえば、十返肇は56年9月号『婦人公論』において、「五年ほど以前から「十代」がジャーナ

リズムに、にぎやかな旋風を巻き起こしていたことが、まず考えられる。「十代もの」とか「性典もの」という言葉が出版界やジャーナリズムで流行し、ティーン・エイジャーへの注目が一般的に高まっていた。現実にも十代の人気者が芸能界に活躍し、彼らを対象とした雑誌も『知性』から『明星』『平凡』に到るまで高級低級さまざまあった(152頁)と述べている。映画で言えば、当時大映は、『十代の性典』『続十代の性典』『続続十代の性典』『十代の誘惑』(53年)、『十代の秘密』(54年)、『十代の反抗』(55年)、『裁かれる十代』(56年)と十代ものを連発していた。

一方、ティーン向け高級誌として名の挙げた54年11月号『知性』(河出書房)では、「十代の夢」と題して南博ら社会心理研究所が、次のように指摘している。

「敗戦まで、日本には「青年期」がなかったとさえいわれている。それは、日本では、青年期の人々が一人前の人格として殆ど認められなかったからであろう。徴兵検査を境にして、それ以前は判断力のない子供として扱われていたのが、それ以後は、急に大人として待遇されるようになるのである。子供と大人との途中の段階がなかったことが、十代の若い世代から、発言力を奪っていたのである。ところが戦後、ティーン・エイジャーズが、一つの世代として問題にされはじめたのは、彼らが、何らかの発言力をえたことの証拠であろう」(101頁)

また「このティーン・エイジャーズたちの心理を巧みに利用したのは、読者の平均年齢が十八才三カ月といわれる雑誌『平凡』」(102頁)であった。

この『平凡』(平凡出版、現マガジンハウス)に取り上げられた当時のスターたちについて、54年8月29日号『週刊朝日』の記事「十代の象徴たち：その魅力は何か」は、「戦争直後の笠置シズ子とか、美空ひばりの人気はいわば超世代のもので、あらゆる年齢層にうけた。戦争からの解放感

2) もちろん戦前からティーンエイジ文化の萌芽はあった。「他から明確に区別され、非常に可視化されたティーンエイジ文化と、社会的タイプとしての「ティーン・エイジャー」の明白な出現は、アメリカでは40年代に始まり、50年代後期に英国に達し、当然、こうしたプロセスの分析は、初めて「世代」を主要変数とするものとなった」(Davis, 1990: 138-139)。

がそうさせたのだ。人気スターの年齢的分類がまだできぬ時代であった。／ちかごろは六三制も板について、所謂アプレ層が整理され、占領期間を終わる頃から、「高校生」層が明白に形づくられてきた。彼らの人気が自分たちと共通の考え方、生き方をもっている若いスターにあつまりだしたことは、正常な状態であり、不健康なものではない」と主張している。こうしたティーンたちのファッションは、当時の彼・彼女たちにとっての主要なメディアである映画やダンス（ホール）と深く関わっており、55年夏には太陽族の原型とも言うべきマンボスタイル（マンボ族）が流行している。

プロト太陽族

周知のように太陽族は、湘南に集う無軌道な若者たちの生態を描いた石原慎太郎の小説『太陽の季節』に由来し、この作品が56年に芥川賞を受賞し、同年映画化されたことによって一気に社会現象化していった。その反響の大きさは、30年以上を経た、98年3月号『文藝春秋』での「思い出に残る芥川賞作品」読者アンケートの結果——『太陽の季節』は総数8,122票の約11%にあたる891票を獲得し第1位——からも容易に類推できよう。

だが、このアンケート結果は、小説の内容や石原慎太郎個人の力というよりは、『太陽の季節』（日活）で銀幕デビューを果たし、石原慎太郎脚本『狂った果実』（56年）の主演に抜擢された実弟石原裕次郎の人気との相乗効果によるものであった。処女作『灰色の教室』やデビュー作『太陽の季節』以降たて続けに発表・公刊された石原作品の多くは、中産階級子弟である不良学生たちが喧嘩と放埒に明け暮れる、といった体のものであり、そこには葉山のサマーハウス、逗子のヨットハーバー、油壺のヴィラ、銀座並木通りでのナンパ（『太陽の季節』）や、品川Pホテルでのダンスパーティ、クルマは54年型ポンティ、地方で鉱山会社を営んでいる親が、上京した大学生の子供のためにこしらえた「東京支社のビルの四階の贅沢なアパートメント」（『処刑の部屋』）などが、小道具や舞台背景として散りばめられてい

た。実際に、石原兄弟の父潔は山下汽船の重役であり、小樽から東京への転勤の際には、一家は逗子に会社から住居を与えられ、湘南高校から一橋大学に進むことになる慎太郎と高校から慶応へと進んだ裕次郎のために、父はヨットを買い与えている。また湘南での裕次郎の遊び仲間たちは、その後「太陽族元祖会」を名乗ったりもしている（佐野，2003）。

こうした兄弟の個人情報マスメディアを通じて喧伝されることで、読者・観客の側は、『太陽の季節』での兄道久（三島耕）・弟竜哉（長門裕之）、『狂った果実』での兄夏久（石原裕次郎）・弟春次（津川雅彦）の関係を、どこかで石原兄弟の現実の物語とオーバーラップさせながら受容していった。それゆえ、小説の登場人物の不品行への反感が、時には石原慎太郎個人への攻撃として表明され、慎太郎の側も、さまざまなかたちでマスメディアへの露出を通じて挑発的に自己の存在を誇示し、また小説の題材やインスピレーションを、裕次郎とその周囲の交友関係から得たことを明言していた。慎太郎自身は、当時の自身の作品について次のように回顧している。

「社会的に見ると、ようやく戦後が終わり、現在に続く消費社会が台頭してきたころだった。もちろん当時は現在のように中産階級意識の階層が大部分の社会ではなかったから、いろいろ階級差みたいなのがあった。アンダーミドルもあったし、アッパーミドルもあった。私はあの小説に出てくる、私たちの青春風俗というのは、身分が学生ただだけに一般の社会人よりも当然消費能力は低いわけで、その限りでは背伸びもしていたといえる。しかし若い人なりに、消費社会があたえる生活様式や、風俗から醸し出される情念・情感というものに対しては非常に敏感だった³⁾

前年から神武景気に入り、経済白書の文言「もはや戦後ではない」が流行語となった56年。慎太郎の感応した新たな消費社会の台頭について、竹内洋は次のように述べている。「石原の初期作品は、新制大学キャンパスを支配した旧制高校的な

3) 『“太陽族”の季節』学研、1982年、138頁。

るものへの違和感である。・石原が一橋大学という旧制高校・帝大的な文化と異なるところで学生生活を送ったこと、身近に、左翼インテリ風な学生文化つまり「ロシア型」学生文化とは違ったジャズとダンスとヨットに興じる「アメリカ型」学生文化（裕次郎）を見ることによって彼の作風が練りあげられたのだろう」（竹内，2003：80）。こうした「青春風俗」は、56年夏に爆発的な流行をむかえ、やがて石原兄弟らプロト太陽族の手を離れていく。

メディアエイトッド太陽族

この太陽族をめぐる狂乱（craze）の背景には、「敗戦の一九四五年には映画館は八四五館だった。翌一九四六年には一三七六館、入場者数は七億三〇〇〇万人。これが一九五八年七〇六七館と一億二七〇〇万人にまで増大する」（佐藤，1995：229）という当時のメディア環境があった。この入場者数は、当時の日本の人口比で12.1となり、日本人のすべてが一月に一回以上映画を見に出かけていた計算となる。53年に始まったテレビ放送にやがて凌駕されるものの、この時期映画は巨大なマスメディアであった。現にこの太陽族ブームの担い手であった36～45年生まれを指して、「キネマ世代」という呼び方も存在する（川島・小原，2002）。

そのキネマ世代の声を拾っておくと、

「ぼくの周辺には、ヨットやスポーツカーはいうに及ばず、ヴィラもナイトクラブもなかった。スコッチのウィスキーもコニャックもない。元華族の令嬢も、新興財閥のお嬢さまもいなかった。／しかも、それが如何にも日常だということになると、畳1枚1000円の日常とは何なのだろうという思いだった。／何十キロしか離れていない湘南海岸が、地球の果て、あるいは、文化圏の違う国のように遠く思えたものである。・その年の夏から秋、海岸はもちろん街中にも太陽族があふれた。／風俗として、前年のマンボ族をひきついだようなところもあったが、大体は、映画における石原裕次郎をそっくり真似た。／歩き方も、しゃべり方もなぞった。／慎太郎刈り、黒いサングラス、アロハ、白いコットンパンツ、デッキシュー

ズ、の若者がドッとあふれた」（阿久，2000：46）

「当時の我々は日帰りの海水浴にも疲れ、ひまをつぶす一人のガールフレンドもなく、場末の映画館の片隅で、五円のアイスクャンデーと裕次郎の太陽族にうじうじした欲望をロマンチックに昇華していた。現実はきびしかったが裕次郎兄貴はさえていた。・裕次郎が小林旭や渡哲也と決定的に違う点は、いかに与太ったところでその底には、常にプチブル的風貌を漂わせているということである。彼には日常的労働の翳りがほとんど見られない。当時の我々が絶望的に憧れた理由のひとつもそこにある。貧乏人ほど軽蔑しながら裕次郎に傾倒していたといっても言いすぎではない」（西脇，1976：85-86）

「当時の大人たちはこの作品のもつ「反倫理性」に驚愕したようだが、筆者たちはもっと単純に小説の登場人物たちの「豊かで優雅な暮らしぶり」に仰天したのである」（井上，1995：144）

「エリートの御託宣だの、前衛党の指導原理だの、既成の常識だけでは動かない、大衆の欲望が主役をつとめる時代が到来しようとしていたのである。・その年から数年間、全国各地にサングラスに慎太郎刈り、そして左足を少し引きずるようにして歩く若者が氾濫した。筆者と同室のあの法大生も、その年の秋の砂川闘争に『太陽の季節』を上衣の下に忍ばせて出かけて行き、党の指導に頼ることをせず、若さにまかせてただむやみに警官隊と殴り合う毎日を送った。そして筆者などもそのころ髪型を慎太郎刈りに変えていた。やはり焼餅など思想の敵となり得ないのである」（井上，1995：152-153）

「娯楽は映画だけという時代 ・確か三十三年の正月だったか「石原裕次郎という俳優がもの凄い人気だよ」という噂を聞いて、さっそく『嵐を呼ぶ男』を観た。場所は上野日活…。最初に驚いたのは場内が超満員だったこと。全員が立って観ている。つまり椅子席でも椅子の上に乗って、伸び上がって観ているのだ。立錫の余地もないとはこのことだ。・戦後という時期が、日本映画では裕次郎の出現で終わったのである。・本当の裕次

郎旋風を起こしたのは、この映画だと思う」⁴⁾

「あおぎ見る太陽族の旗 …田舎の高校では、太陽族の世界は時代の最先端に行くモラル、風俗といった印象はあったけれど、やはりどこか遠いところにある別世界だった。ところが東京へ来て翠荘に入ってみると、それが急に身近になった感じだね。もちろん、湘南の坊ちゃん嬢ちゃんと違って、僕らにはきらめく海もヨットもなかったし、やってることもかなり違ってはいたけれども…。『太陽の季節』に登場したような太陽族そのものは特殊な種族に過ぎなかったが、若いものが現象的に太陽族的にならざるをえない状況はすでにあった」⁵⁾

56年9月8日号『週刊東京』の記事「“太陽映画”はいくら儲けたか：連続ヒットに息を吹き返した日活」によれば、「映画界の景気が絶頂にあった昭和二十九年頃までは、一本で一億以上稼ぐ作品がザラで、各社何れも年間に一億から二億、三億と稼ぐ作品数本が目白押しに並んでいたものである。松竹の『君の名は』が三部作で十億近く稼いだなどという記録は、もう当分破れそうにもないがそのほかにも、同じく松竹の『忠臣蔵』が三億、『二十四の瞳』が二億五千万、東映の『ひめゆりの塔』が二億、『紅孔雀』が連続物で二億五千万、大映の『楊貴妃』が二億、といった例があげられる。ところが今年あたりは、興行界の不況もいよいよ深刻で、一億稼ぐのは大ヒットという有様」の中で、日活の『太陽の季節』・『狂った果実』・『逆光線』(岩橋邦枝原作)はあわせて5億円のヒットをとばし⁶⁾、不良少年ものでは定評のある大映も『処刑の部屋』で1億5千万円の配収を見込み、東宝も同じく石原原作の『日蝕の夏』を準備中だという⁷⁾。かくして太陽族ブームは、「太陽族映画ブーム」としてヒート

アップしていくことになる。

モラル・パニックとしての太陽族

こうした映画界の動きに待ったをかけたのが、当時勃興しつつあった「週刊誌」であった。もちろん新聞社系の週刊誌はすでに存在していたが、56年2月の『週刊新潮』を皮切りに、同年の『週刊アサヒ芸能』(徳間書店)、57年の『週刊女性』(主婦の生活社)、58年の『週刊大衆』(双葉社)・『週刊明星』(集英社)・『週刊女性自身』(光文社)、59年の『週刊現代』(講談社)・『週刊文春』(文藝春秋)・『週刊平凡』(平凡出版)・『週刊漫画サンデー』(実業之日本社)・『週刊コウロン』(中央公論社)と創刊ラッシュが続き、59年には週刊誌の部数が、月刊誌のそれを初めて凌駕している(塩澤, 1982; 日本出版学会, 1996)。また、58年版『出版年鑑』(出版ニュース社)によれば、週刊誌各誌の発行部数は、『週刊朝日』120万、『サンデー毎日』100万、『週刊新潮』70万、『週刊読売』65万、『週刊サンケイ』55万、『週刊女性』40万、『週刊東京』30万、『娯楽よみうり』30万、『週刊漫画』(芳文社)25万、『週刊アサヒ芸能』25万程度であったという。

これら週刊誌のうち、56年3月25日号『週刊新潮』の記事「若き「背徳者」の波紋：芥川賞『太陽の季節』の投じたもの」が、まずこの小説を問題視し、5月5日号『週刊東京』の「太陽族」の健康診断」では、大宅壮一が「あれから十一年、戦後派の中から新しいアプレ族が誕生した。「太陽の季節」で登場したいわゆる“太陽族”と呼ばれる一群の青年男女がそれ」と、初めて太陽族の語を用いている。以降、映画封切りとともに批判の矛先は太陽族映画へと向けられ、7月15日号『週刊朝日』「もういい、慎太郎」：“太陽族映画”をたたく」、8月5日号『週刊読売』「もうごめん太陽族映画」全国に広がるボイコット運

4) 河出書房新社編集部編『わが世代 昭和八年生まれ』河出書房新社、1980年、230頁。

5) 河出書房新社編集部編『わが世代 昭和十三年生まれ』河出書房新社、1978年、228頁。

6) 岩橋邦枝は、当時お茶の水大学の学生。週刊誌等で「女慎太郎」といった扱われ方をしてきた。

7) 56年5月27日号『週刊読売』「十代スターも反抗する：『処刑の部屋』」によれば、「主人公には“和製ジェームス・ディーン”で売出し中の川口浩君・床屋へ十八回も行って慎太郎刈りを工夫するほどの熱心ぶり」だったという。川口松太郎・三益愛子の息子である川口浩も、慶応高校中退。津川雅彦も、『狂った果実』でデビューした当時は早稲田高等学院の学生であった。東京の私立一貫校特有の遊び人文化が、この時期の映画・音楽・テレビ産業を支え、太陽族・六本木族・みゆき族などの土壌となっていた。

動)、8月11日号『週刊東京』「ヤリ玉に上った映倫: 騒がしすぎる太陽族映画」、8月26日号『サンデー毎日』「“太陽族映画”をどうする」、9月2日号『週刊サンケイ』「“太陽映画”の体臭に世論大いに怒る!」と、ほぼ全誌が太陽族(映画)批判の論陣を張ることになる⁸⁾。また、7月17日号『週刊新潮』「裁かれる太陽族: 家庭裁判所・少年審判部」や8月5日号『サンデー毎日』「月明下の太陽族: 戦後最大のグループ昭島友好会」といった記事では、愚連隊や非行少年の別称として「太陽族」を使用しており、フォーク・デビル(Cohen, 1972)としての太陽族像が定着していた様子もみてとれる⁹⁾。

そして、8月6日号『週刊新潮』「バンガロー族と月光族: 海と山の青春の宿」において「「一般に去年とくらべるとグンと派手になりましたね。太陽族をやれない? 階級の人も、無理して太陽族ぶってみたり、あこがれたりしているということでしょう」という片瀬橋交番の巡査の言葉は、核心をついている」と指摘され、8月12日号『毎日グラフ』「羽根をのばす衛星族」においては「これらの衛星族は、なぜ、非太陽族を主張するのか? …1、いわゆる太陽モノの小説や映画の主人公たちみたいには、うまく異性との関係を成就できない。2、ブルジョアの子弟ではない」と揶揄されたように、プロト太陽族とは異なる階層の人々がこの夏湘南の海辺に押し寄せ、太陽族ならぬ「月光族」「衛星族」と命名されてもいる¹⁰⁾。

この年の秋口からは、月刊誌の側も9月号『婦人公論』の板垣直子「“太陽族”の実態と批判: 青春の破壊—“もういい”ではなく、もっと批判を」、10月号『知性』の向井啓雄「太陽族は葬る

べきだ: ジャーナリズムの落し子」、10月号『別冊知性』の猿丸一平「ブームをつくった張本人たち: “太陽族”はマスコミのでっちあげたピエロだ!」、56年10月号『中央公論』丸山邦男「週刊ジャーナリズム批判」など、太陽族問題を大きく採りあげ始める。特に丸山のものは、単に太陽族批判というよりも、マッチポンプのように「××問題」「△△ブーム」を作りだす週刊誌を非難する内容であった¹¹⁾。だが、こうした批判も翌年には沈静化していき、「石原裕次郎を取り上げた記事(『朝日』33・2・9号)の見出しをみてみよう。『タフガイの魅力—石原裕次郎の素描』=その魅力、イカスじゃないか、けんかスター、悪人相、低音……、その生活=さびしがりや、理想の女性、ヘミングウェイを愛読……。彼に関してはこのほかの週刊誌でも再三再四とりあげられた」(週刊誌研究会, 1958: 95)ように、石原兄弟は徐々に「フォーク・デビル」から「ヒーロー」へとその位置をずらしていく。

加藤秀俊の「中間文化論」(57年3月号『中央公論』)における、①45~50年=高級文化中心の段階(総合雑誌)、②50~55年=大衆文化の時代(ラジオ、ダンス・ホール、パチンコ、映画館、『平凡』)、③55年~=中間文化の時代(新書、週刊誌)の区分に従えば、結局、太陽族(映画)問題とは、①の文化資本を享受・保持すべき階層にあるはずの石原兄弟が、①の権威を否定し、②的な世界に耽溺し、かつ②の階層から多くのエピソードを派生させたことに対する、③の階層の人々(週刊誌読者層)の反発であったと言えるだろう。だが加藤も「石原慎太郎氏の一連の作品なども、それを風俗の面から見ると、学生文化の

8) こうした批判を受けて、日活は『灰色の教室』の製作を中止している。

9) 56年8月20日号『週刊新潮』「午前二時の社交界: 軽井沢の上流太陽族たち」のように、上流階級の放恣に対しても太陽族のレイベルが用いられていた。

10) 56年8月12日『週刊朝日』「太陽族の海: 実は夜が舞台の“モグラ族”」など。この年の7月20日から8月9日までの間、「太陽族発祥の地とも言うべき逗子、鎌倉両署管内では、傷害、恐喝未遂、殺人未遂、強姦がそれぞれ八件二十九名にも上っている」(56年9月2日号『週刊サンケイ』)。

11) もちろん、すべての週刊誌が同様の批判をしていたわけではない。「週刊誌の典型的なセックスの表現は、肉体主義=セックス解放=セックスの消費財視の方向に常に力点がかかり、精神主義=性モラルの確立=生産財視という方向には力点をおかないのが特徴のようである。／たとえば、比較的セックスの記事を扱わない『週刊朝日』『サンデー毎日』が、31年の夏、「太陽族」を、「現代はドライ時代か——中年読者に捧ぐひとつの太陽族分析」(『朝日』9・23号)といった形で問題にした場合は、後者の方向を強くふくんでいた。しかし「軟かい」週刊誌のチャンピオン『週刊新潮』の場合は、これと違い前者の方向に徹しており、週刊誌のセックスはこれに代表される」(週刊誌研究会, 1958: 91)。

中間化を示すひとつの例であるかもしれない(258頁)と言うように、本来石原兄弟は③の人々にこそ受け容れられやすい存在であり、57年以降、慎太郎は「中間小説」の作家として、裕次郎は都会的な映画・歌謡のエンターテイナーとして安定した地位を築いていく。

太陽族その後

その後も毎夏若者たちは海岸に集まり続け、57年8月30日号『娯楽よみうり』の記事「月光族ハンランす：浜辺は夜中も大繁盛」では「[月光族]とか「水爆族」とかいわれるティーン・エージャー」の登場が、58年7月27日号『週刊サンケイ』「海の“若い獣”たち：ルポ真夏の青春海流をゆく」では、「一昨年は太陽族といわれるチンピラやぐれん隊が目立つ存在だった。昨年は目立たなくなった。というのは極言すれば海へくる若者達すべてが太陽族になってしまったからである」と指摘されているように、太陽族のスタイルはビーチ・ファッションとして普遍化し、その行動様式も若者全般へと拡散していった¹²⁾。「太陽族の制服拝見」と題された56年8月26日号『サンデー毎日』の記事にある銀座街頭でのスナップ写真を見ても、ごく一般的な「太陽族の制服ともいべきアロハと落下傘スタイル」の男女が撮られているのみで、太陽族のファッションは確固たるユニフォームたりえていない。また「これが<太陽族>だという特定の定番ブランドがあったわけでもなく、ファッション雑誌も無かったこの時代、アロハの柄や素材も、今見るとアロハ風にす

らなっていないものも存在した¹³⁾」というように、太陽族ファッションは確たる像を結ぶこともなく、いつのまにか雲散霧消し、後の世代・時代に大きな影響を与えてはいない¹⁴⁾。そして、当然ながらすべての若者がこの喧騒に巻き込まれていたわけでもない。

「当時、慎太郎刈りとリーゼント派の二通りが若者を代表するヘア・スタイルで、慎太郎刈りが太陽族なら、リーゼント派がロカビリー族というふうに大まかな区分ができた。・慎太郎刈りは、太陽族、グレン隊、スポーツ選手に多く、どちらかといえば硬派で、リーゼントになるとジャズキチ族、バーテン族など軟派な連中に人気があった。しかし、当時の若者がすべて、この両派の髪形のどちらかをえらんだのではない。大半は、オーソドックスな七三分けで、流行にノラない抵抗派だった¹⁵⁾」

だが、太陽族が示したいくつかの特徴は、思いのほか大きな社会的含意をはらんでいたのではないだろうか。先の①～③の階層文化で言えば、太陽族現象には、プロト太陽族の出自としての①も、メディアエイテッド太陽族の出自としての②も、さらには最終的には石原兄弟の作品を愛好していくことになる③も内包され、それらは渾然としていた。階層・階級の差が文化の差であった時代から、階層(文化)よりも世代(文化)が卓越する時代への転換点に、太陽族は登場したのである¹⁶⁾。政治学者松下圭一は、59年10月号『思想』

12) その後、59年に登場したカミナリ族をもじって、モーターボートに興じる「水雷族」なる表現も登場している(61年6月5日号『週刊サンケイ』)。

13) 2000年8月号『中洲通信』、45頁。

14) 上野昂志は、「[カミナリ族]にしても「みゆき族」にしても、あれがそれだと指さすことのできる連中がいたが、「太陽族」の場合は、それがひどく漠然としているのである。そして、これが肝腎なところだと思うが、にもかかわらず、そのイメージは、他のどの族よりもっとも鮮烈なのである。それは、「太陽族」が、それ自体イメージであり、個別の風俗やグループではなく、何よりも時代の気分を表していたからであろう」と回顧している(94年7月8日『アサヒグラフ』、89頁)。

15) 河出書房新社編集部編『わが世代 昭和十一年生まれ』河出書房新社、1979年、216-217頁。

16) もちろん、階級政党の指導を信じ、「青年」たちの階級意識の覚醒に期待をよせる言説も存在した。「第四の問題は学習の問題である。“かつて”の闘争の誇りも、警察に逮捕されたときに感じとった反体制的感覚も、階級的感覚を階級意識として自覚させ、さらに階級的思想にまで結晶させる系統的な学習活動がなかったならば、会社の激しい巻き返しの中で、“闘う戦後世代”から再び単なる“ロカビリー族”に転落しないとは限らないのである」(石原慎三「労働組合と戦後世代」59年7月号『思想』、37頁)。またイギリスのテディ・ボーイ研究で知られるフィヴェルは「広く知られた非行であるアメリカのストリートギャングや、よりエキゾチックな現代的なユース・フォーク・デビル——ドイツの Halbestarken、スウェーデンの Skinnkunnattar (革ジャケット)、フラ

に掲載された論文「戦後世代の生活と思想(下)」において次のように述べている。

「そこで大衆文化は、全般的に若い年齢層を対象とする。すなわち生産のみならず消費においても、中間層を中心に、若い世代を社会的に前面におしだしてくる。このころは映画・大衆雑誌などに明確にみられるが、さらに最近では「流行」自体、漸次、若さを追ってきている。たとえば、かつて中年のブルジョア・マダムが服装の指導者であったが、最近ではBG、さらにティーン・エイジャーへと変わりつつある」(86-87頁)

「太陽族、月光族、カリプソ族、ロカビリー族などつぎつぎ銘うたれてマス・コミに登場するようなかたちのティーン・エイジャーは、数字としてはわずかなものである。彼らは身分的安定性をもっていた旧「家族」の崩壊、政治的経済的矛盾の激化さらに大衆社会状況の露呈にともなって、賤民化したものに過ぎない。しかしそれが、「例外」としてではなく、「事例」として、マス・コミにのって社会的に拡大再生産されているところに、現代の問題が伏在している」(89頁)

要するに、若者のアイデンティティに占める消費やメディア、さらにはそれらによって共有される世代体験の意味あいが増大していったのである。この傾向は表2にあるように、血縁・地縁から相対的に切り離され、空前絶後のボリュームをもつ団塊の世代が、若者文化の前面に登場してくる60年代にはいっそう顕著となってくる。

【2】ストリート・カルチャーとしてのみゆき族

「みゆき族」前史

60年代に入ると、アメリカのビート(ニクス)

表2

	1955年	1965年
東京の青年人口(20~24歳)	100万人	158万人
青年人口のうち大都市居住者	38%	46%
高校・高専進学率	51.5%	70.7%
大学・短大進学率	10.1%	17.0%
平均世帯人員	4.97人	4.08人
農業従事の青少年指数	100	26
高校求人倍率	0.7倍	3.5倍
都市総合消費水準(昭9~11年を100)	106.5	174
エンゲル係数	46.9	38.2
高3男子身長	161.8cm	166.8cm
高3女子身長	153.2cm	154.8cm
青少年死亡数	15.0万人	6.9万人
自殺者数(15~24歳)	8,231人	2,690人
百貨店売上高	2,123億円	9,900億円
電話加入数	217万人	849万人
乗用車数	15.7万台	187.8万台
NHK テレビ契約数	11.2万人	1,822.4万人
鉄道輸送人員	2,800万人	10,100万人
レコード生産数	1,450万枚	9,093万枚
家裁扱少年事件	33.1万人	108.7万人
刑法犯未成年者比	20%	36%
衆院選挙20歳代棄権率	14%(58年)	36%(69年)

坂田, 1979: 252

から派生した「ビート族」や「ファンキー族」など、ジャズ(喫茶)の流行と連動した族が登場し¹⁷⁾、61年には「六本木族」がマスコミを賑わせている。だが、62年6月号『日本』に掲載された野坂昭如「変貌する夜の歓楽街・麻布六本木」によれば、「厳密な意味でいうと、六本木族は、三十三年の夏に誕生し、三十五年には、すでに形はともかく、内容を失っている。その後に見れたのは、彼らのエピゴーネン達に過ぎない」(130頁)という。そもそも六本木に深夜若者たちが集まるよう

ンスの Blousons noir、日本の太陽族(太陽の子供たち)、オーストラリアの Bodgies、ロシアの Stilyagi(スタイルボーイズ)——を同様な社会的混乱によって強いられたコンプレックスの宣言として引用し、実際に『ティ・ボーイ・インターナショナル』とまで言っている」(Davis, 1990: 155)が、少なくともプロト太陽族は、ティ・ボーイのように労働者階級を出自とするものではない。

17) もっとも、当時「ジャズと云う言葉は厳密な意味でのリアル・ジャズに限らず、世間一般の使い方によって広くコマーシャル・ジャズ、アメリカの流行歌、マンボから果てはルンバまで含んで」いた(1954年11月号『知性』、105頁)。ジャズ喫茶では、歌謡曲からロカビリーまで、はば広く演奏されていた(谷・近藤, 2003; 井上・寺内, 2003)。

になった背景には、「車の普及、TVの発達、三十四年の基地返還」の三つの要因があり、当初「ほとんどは、慶応の生徒、父親は大会社の社長クラスか、元大臣で、月三十万ぐらいの小遣いをつかい、中には六台の車を持つ少年もいた」という特権的な階級の子弟が、クルマのとめにくい銀座を避け、六本木に集まり始めたところに、テレビ局が近いことからニューフェイスやロカビリー歌手などタレント（の卵）たちが合流し、六本木族は形成されていった。そして、彼・彼女らをメディアが取り上げていく中で、そのエビゴネンが登場してきたが、「2次六本木族は中流家庭のハイティーンが多く、遊び方も1次に比べると派手さはなかった」（アクロス編集部，1995：81）という¹⁸⁾。

この六本木族は、ある街を舞台としたという点で、みゆき族をはじめ多くのユース・サブカルチャーの前触れとなるものであったが、そこで特定のファッションスタイルを共有されていたわけではない。この時期、みゆき族との関係で注目すべきは、「アイヴィー」の日本上陸である。54年に婦人画報社から婦人画報増刊『男の服飾読本』（63年に『MEN'S CLUB』に改題）が出版され、すでにアイヴィーの紹介は始められていたが、これは先行する『男性専科』（50年に『スタイル』（スタイル社）増刊号として創刊）とは明らかに「内容も対象年齢も違っていた。「男専」はオーダーメイドの紳士服、ならびに愛好者向けだったが、「男の服飾」はレディーメイド中心で、年齢も下げてあった」（くろす，2001：9）という。また、アイヴィー・ファッションの代名詞ともなったヴァン・ジャケットを率いた石津謙介も、「“男の服飾”の創刊から十号目くらいまで

は、VANも非常に prestéige の高い、ハイ・ブロードでオーソドックスなスタイルを発表していた。…その“男の服飾”なのだが、号を進むにつれて、内容を少しずつ、低年齢向けにしていくことになった。そんなわけで、VANのファッションも、それに同調し、少しずつ若くなっていく」と語っている。要するに「VANが年齢層を下げた具体的な理由に、婦人画報社と組んだことがある」（マガジンハウス，1996：225）。

「みゆき族」とは、ハイティーンたちが、特にその男子がファッションを楽しみだした現象のはしりであり、彼らの眼前にはまずアイヴィーがあった。そして見逃すべきでないのは、ハイティーンに達し始めた団塊の世代が、まず最初に起した Youthquake であった点である。

みゆき族の生成・消滅

64年夏、銀座みゆき通りに若者たちがたむろし始め、「ナンパ目的でやってきている男女も多く、出会いを求めて都内だけでなく、埼玉、千葉など東京近県や地方からもやってきた。六本木族の主流が東京出身のお金持ちの子弟が多かったのに対して、みゆき族には地方出身者や中流家庭の子弟も少なからずいた」（アクロス編集部，1995：86）。

また石津謙介も、「その8割は高校生。次々と仲間を作り、グループごとにショーウインドーに立つ。土日には200人ものみゆき族が首都圏から集まり、一種の社会現象となった」と回顧している¹⁹⁾。そうした彼・彼女たちに対してみゆき族という呼称が浮上してくるわけだが、その過程には以下の引用にあるように、「西銀座族」や特に女性を指す「ロング族」といった言い方も存在していた²⁰⁾。

18) 太陽族や六本木族が、圧倒的な「豊かで強い」アメリカの引力圏内にあったのに対し（NHK放送世論調査所，1982；吉見，2003）、みゆき族以降は、さまざまな海外の動きと連関しつつ、ドメスティックなユース・サブカルチャーが数多く生み出されていくことになる。たとえば、一部のみゆき族が好んだ「コンチ（ネタル）」の代名詞 JUN は「VANがアイビーファッションと称した細身のズボンを打ち出して、大当たりをとった昭和34年に、立教大学のバスケットボール部の学生だった佐々木忠らによって作られた会社、三文字ブランドの乱立時代を生き抜いてヨーロッパテイストのトラッド・ファッションでのし上がってきた会社である」（マガジンハウス，1996：238-239）。イギリスからの影響で言えば、64年6月15日号『平凡パンチ』の記事「おしゃれ・モッズ対かっぱ頭・ロッカーズ“血の決闘騒ぎ”の真相」にあるように、モッズの動きはリアルタイムで伝わっており、それはやがてGSファッションとして特異な展開を遂げた。

19) 90年4月1日号『サンデー毎日』「青春残像」、219頁。

20) 「さいきん、銀座やシブヤなど、東京の盛り場で15年前に流行したロングカートを履いた女の子が現れ、話題を

『東京新聞』（一九六四・七・二六）に報じられている、彼らの記事を要約しておこう。西銀座族の年齢は十五、六歳から十八歳ぐらいで、女の子はウエストの紐ベルトをうしろでだらりと結んだスリムなロングスカートをはく。伸びっぱなしのロングヘアか、ぐっと短いセシル・カット（これは五八年に公開されたフランソワーズ・サガン原作の映画『悲しみよこんにちは』に登場する、主演のジーン・セバーグ扮するセシルの髪型によるもの）、素足にサンダルまたはゴムぞうり、着替えや化粧道具を入れた大きな麻袋を引きずるようにして持って歩く。／男の子はつんつるてんのコッパン（コットンパンツのこと）、スニーカー、アイビー調のダーク・トーンのチェック（マドラスチェックをさす）のシャツ、縞のハンティング、パーミュダショート、太い糸のコットンのハイソックスをはき、女の子と同じような大きな麻袋か、黒の皮製の角型ケースを持つ。／みゆき族というのは、西銀座族とほぼ同じだが、やや金のかかった装いをして、もっぱら銀座のみゆき通り（別名・親不孝通り）を徘徊する」（千村、2001：112）

だがこうした亜種も、やがてみゆき族（ないし女みゆき族）という呼称に統合されていく。その男性ファッションは、あくまで「アイビー調」であって、「みゆき族」イコール「アイビー」と解釈されているが、あれはアイビーとは違う。アイビー風「ニュー・ファッション」というべきだろう」（くろす、2001：102）。

「男は半そでボタンダウン。マドラス・チェックか、白のオックスフォード。オックスフォード派にはノーネクタイもいたが、自称正統派は黒のニット・タイを締めた。タイをする連中は、上にニット・ベストを合わせた。赤、黄が多かった。／ボトムスは、パーミュダかオフホワイトのコットン・パンツ。パーミュダ・ショートにはひざ下までの長いソックスをはいた。コットンパンツは

というと、これが謎なのだが、やたら短い丈を好んだ。ソックスが約一〇センチ見えるのが平均的な寸法。／コットン・パンツもパーミュダも、ともに後ろに小型の尾錠を付けた。これが「アイビー尾錠」とか、「アイビー・ストラップ」と呼ばれるアクセントで、これがないのは「ニセモノ」呼ばわりされた。／靴はまだ混乱期で、なんでもありだった。中でも多かったのはローファーだろう。「VAN-REGAL」のローファーは三八年秋から売られていた（三千八百円）。スニーカーはまだ輸入物しかない。VANが発売するのはこの年の秋のことだ。／服以外で目についたのはヘアスタイルと歩き方。「アイビー・カット」と称する七三分けが主流。故・J・F・ケネディがモデルといわれる。／歩き方の特徴。両手をズボンのポケットに入れ、出す足の反対の肩を突き出しながら、首を左右に振る。だれの考案になるものかはわからないが、不思議な歩き方がはやったものだ」（同102-103）

一方、「女のファッションは、男ほど画一的ではなかった。その理由、女性には「VAN」「JUN」のような既製服メーカーがなかったからだ。まだ手製の服を着ていた時代だった。／いくつかの共通点はあった。まず、頭に三角に折ったハンカチ——白ではなく色物——をかぶる。ワンピース、ツーピースともに素材は木綿で、スカート丈はロング。スカートと共地の長いベルトを後ろで結ぶ。それはリボンをつらしているように見えた」（同104）。

当初はこうしたファッションを披露しあうために、みゆき通り界隈にたむろしていたみゆき族であったが、徐々にナンパ目的の者も集まり始め、メディアに取り上げられることでさらにその数を増していった。

テリー伊藤談「みゆき族したのはとっても純粋な気持ちからなんだ。女の子との出会いを期待していたのと、本当にお洒落を見たかったからな

まいている。とくに夕ぐれどきともなると、銀座のおしゃれ横丁にロングのお嬢ちゃんがサンサンゴゴとして集まってくる。・銀座のみゆき通りなんか歩いてると、男の子が声かけてくるの」（64年7月29日号『週刊漫画サンデー』「特別座談会：銀座のロング族気炎をあげる！！」、66-67頁）。この座談会出席者の内訳は、高校3年生2名、18才無業「ウチはオヤジが意外とお金持ってるからなんにもしてないんだ」、そして19才大学生。

の。野球だったら大リーグ、サッカーならイタリアに行く、それと同じ気持ちで銀座には行ってたんだよ」²¹⁾

川崎徹談「毎週日曜日になると、朝の10時頃、銀座に集合するんです。銀座のみゆき通り。そう、みゆき族。僕も、けっこうそうだったんです。ほとんど毎週、ズタ袋を下げていくわけです。ウロウロしてるだけなのね。むこうからカワイイ娘が来た！って見ると、毎週会う娘なの。とにかく同じメンバーで、ウロウロウロウロしているだけなんだから（笑）。そういえば、高校生主催のダンスパーティーってのも流行ったな。大学生のバンドいれてね。ツイスト、サーフィンなんてやるわけ。そこにみゆき族が大挙して行く」²²⁾

遊歩するだけのみゆき族は、格別問題行動を起こしたわけではなかったが、商店会からの苦情もあり、オリンピックをひかえた街頭浄化の気運の中で、秋には築地署による一斉補導が行われ、ひと夏限りの現象として消えていった。

『平凡パンチ』とみゆき族

このみゆき族の生成に大きな役割を果たしたのが、64年4月に創刊された男性週刊誌『平凡パンチ』であった。団塊の若者向けに、海外情報・セックス・クルマなどの記事を盛り込み、特にそのファッションページは、それまでの『メンズ・クラブ』などが「書き割りのような背景の前に立つ男性モデルがニッコリ笑っているのをカメラマンがパチリと撮影するという『ニコパチ』写真」ばかりであったのに対して、ストリートでのスナップ写真を多用し、当初は石津謙介構成による〈ウィークリー・メンズコーナー〉なども連載されていた（マガジンハウス、1996：218）。また、大橋歩の表紙イラストには、つねにアイヴィー・ファッションできめた男性のシルエットが登場していた。

そして、その第6号にあたる64年6月15日号特

集「キミはVAN党かJUN党か？」では、「アイビー調とコンチネンタルルック」という違いはありながら、「20代男性のおしゃれ感覚をリードしている」ヴァンとジュンが取り上げられている。

「ヴァン党とジュン党は存在する 銀座を流す——という言葉がはやっている。けっしてギターひきのことではない。用もないのに、おしゃれをして銀座をブラブラ歩くことなのだ。一日に一度は、これをやらないと落ち着かないという常連もいる。／この常連のなかに、ヴァン製品しか着ないアイビー信者があり、また、ジュンのものしか着ないジュン愛用者がいる。かれらは、ときには、西銀座デパートの前にたむろして、道ゆく人を見ていたり、明るい喫茶店の中でしゃべっている場合が多い。しかもおなじものを着ているという一種の連帯感から、ひとつのグループを作っており、おたがいのおしゃれ感覚を批評しあったりしてたのしんでいる」(マガジンハウス、1996：256)

『平凡パンチ』とみゆき族の結びつきの強さを端的に示すのが、「みゆき財布」である。「みゆき族が銀座に出現する二ヵ月ほど前、同じく銀座・平凡出版から『平凡パンチ』が創刊された。／みゆき族のバイブルとなった『平凡パンチ』が思わぬところでも使われていた。表紙で「財布」を作るのである。発明者は不明だが、この紙の財布はみゆき族の間で大ブレイク。ズボンの尻ポケットからのぞかせるのがカッコよかった」（くろす、2001：109）という。

「VANの袋やJUNの袋を小脇に抱えて、銀座のみゆき通りを歩くことが誇らしかったあの頃。そんなに高いサラリーを貰っていなかった私（薄給と言っていいでしょう）が給料の大半をスーツや、シャツや、靴やネクタイに入れあげて行く時代に突入したのでした」²³⁾と回顧されるように、この頃から、多くの男性がファッションを楽しむ、そのブランドの愛好による「党派」分けが進

21) 『別冊 MEN'S CLUB 男のスタイルブック』6、1999年、125頁。テリー伊藤は、早稲田実業高校を経て青山学院大学。川崎徹も中高大と早稲田。

22) 83年12月号『ビックリハウス』「ちょっと早すぎた自叙伝」、95頁。

23) ビーコ「自分のスタイルなんてものはなかった：「ウエスト・サイド物語」から始まった私のおしゃれ」、『イェスタディ'60～'70年代の青春群像』毎日新聞社、1995年、75頁。

んでいった。

そして『平凡パンチ』は、「春に発売した創刊号の発行部数が62万部だったが、それが同じ年の秋、10月には75万部を発行している。まさしく『平凡パンチ』の場合はみながこういう雑誌を待ち受けていた、と書いても差し支えないだろう。潜在的な読者層が雑誌創刊前から存在していたのである。そして、2年後の昭和41年には月刊雑誌の『平凡』、『週刊平凡』に続いてこの雑誌も100万部の壁を突破することになるのだ」(マガジンハウス、1996:340)。65年12月の読者調査からは、『平凡パンチ』読者は、配本状況で見ると東京(34.2%)が、職業別で見ると学生(34.2%)・会社員(32.1%)が中心であるが、学歴別で見ると中卒(14.8%)・高校生(16.2%)・高卒(40.1%)・大学生(14.4%)・大卒(11.4%)とバラエティに富んでいる(江藤、1966)。地方在住者やブルーカラーの若者たちの間にも、アイヴィー・ファッションやみゆき族などの情報が少なからず伝達されており、同世代の人々の動向として共有されていた。そして「六〇年代後半の学園闘争時代には、『P&J族』つまり、『平凡パンチ』と『朝日ジャーナル』を読む若者たちが多かった」(寺田、2003:141)ように、『平凡パンチ』は若い男性にとっての「やわらかい方の総合誌」という地位を築いていたのである²⁴⁾。

モラルパニックとしてのみゆき族

このように族をインキュベートしていく雑誌がある一方で、当然みゆき族をフォーク・デビル視することで、読者を増やそうとした雑誌も存在した。たとえば64年10月7日号『週刊女性』の記事「みゆき族のSEX→その探訪：家出してフーテンバッグに泥の足で銀座を歩く少女たち」には以下

のような件がある。

「あるみゆき族の大学生の話では、交際密度に三段階ある。／「A、B、Cとあるんです。Aはベラカンまで……。ベラカンはキスのことです。Bはペッティング。Cは最後、つまり、すべてを許す……。まあ、初めて会ったその日はA。Cまでいくのに一週間くらいですか。みゆき族のバージンは、一週間もったら、いいほうですよ」(164-165頁)

「フーテンバッグはね。もともとVAN(男性用既製服店)の袋からはやったの。米の袋がいいとか、麦の袋がいいとか言うけど、中味がたくさん入るのがいいのよ。服はIVスタイルからコンチ(コンチネンタルヨーロッパ大陸ふう)に移ってきてるわね。今のみゆきじゃコンチのほうがあはバがきくわ」／念のため、こう語ったのは男の子」(168頁)

また64年10月15日号『週刊大衆』の森柊二の署名記事「みゆき族の掟：ドキュメント'64」に、「バン(組長)は、類を求めて入って来た少女にそう説明し、協定価格も示したが…。「ベラ(接吻)五百円。胸八百円。本番は三千円からヤリ万(一万円)よ…。…サミーたち五人は、他の“みゆき族”と同様、東京の山の手、近郊の衛星都市の中産階級のやや上の部の家庭の子女である」(39頁)とあるように、女性の場合はその性的な放埒が、生まれ育った家庭環境にふさわしくないものとして、男性の場合はファッションに現を抜かず軟弱ぶりが、当時のジェンダーをめぐる社会通念に反するものとして、非難の的となった。

こうした批判や揶揄の中消えていったみゆき族であったが、その後継者も登場している²⁵⁾。

24) 以下は自画自賛にすぎることが、60年代後半のある側面を言い当てている。「日本の若者文化は昭和39年に『パンチ』が創刊され、まがりなりにもたくさんの若い読者を集めることができたことで誕生した。そして、そのおかげで六〇年代の後半に世界中で吹き荒れるカウンター・カルチャーの大波を受け止める場所を用意することができたのだといえるだろう」(マガジンハウス、1996:254)。また『平凡パンチ・フォー・レディーズ』が後の『アンアン』へとつながるなど、大文字の若者文化において『平凡パンチ』の果たした役割は大きい。

25) 64年9月28日号『平凡パンチ』「“みゆき族”にマラソンで挑戦した男 22歳の理容師小島健治君」は、ニセ挑戦状にだまされて集まった人々の中の高校2年生の声「みゆき族? カッコはするけど、みゆき族っていわれるの、嫌いだな。ボクたちはアイビーだから。みゆき族ってのは中三から高一ぐらいじゃない? アイビーは十六から十八ぐらいかな」を伝えている。また、当時少女の転落は、例外なく「アイビー族などといわれる異性」との交遊によって始まると報じられていた(土井、2003:292)。

「昭和四〇年、みゆき族で自信をつけた日本の若者たちは六月の声を聞くと、またも銀座みゆき通り周辺に集まりだした。今回のニューモデルは、前年より一層カジュアル化した。ほとんどが半そでのボタンダウンだった。マドラス・チェックや、米・フォーク・グループ『ブラザーズ・フォー』風ストライプなど。下はバミューダ・ショーツかコットン・パンツ。コットン・パンツの丈は相変わらずのつんつるてん。／合わせる靴は革靴からスニーカーに移った。また、ゴム草履が目立ちだした。はだしにゴム草履は前年には見られなかったニュー・ファッションだった。／三九年はVANの紙袋を抱えていたが、この年は麻袋が圧倒的。コーヒーや豆を入れる麻製の布袋を、二つ折りにして持つのである。女の子もこれをまねた。通称「フーテン・バッグ」。埼玉、千葉、茨城、神奈川県からやって来る若者も増え、中には本物の「フーテン（住所不定者）」もいた。／みゆき族は、小ざれいなストリート・ファッションだったが、今度の若者たちは年齢も低く、汚らしく見えた。マスコミは「アイビー族」と名づけたが、アイビー的とは思えないファッションだった。／銀座商店会から「銀座のこじき」と軽蔑されたアイビー族は、築地署の補導を再三にわたって受けた」（くろす、2001：108-110）

65年4月22日号『週刊大衆』の記事「何処へ消えた？問題の若者の群れ：夜の広場を追われた六本木族みゆき族のその後」には、みゆき族は「アイビー族」へと受け継がれ、六本木族はTBSのある「赤坂族」、NTVのあった「四谷族」へと移っていき、その末流は「青山族」となり、現在は「原宿族」「代々木族」としてわずかに残るのみ、とある。66年には表参道と明治通り交差点あ

たりにクルマで乗りつけ騒ぐ「原宿族」が、社会問題とされたが、やはり六本木族の流れを引くだけあって、高校生中心であったみゆき族よりも年齢層が高く、金持ちの遊び人子弟・子女の族であったようだ²⁶⁾。

「銀座」のトポロジー

では、東京に多くの盛り場があったにもかかわらず、なぜみゆき族は銀座に蝟集したのであろうか。

くろすとしゆきは、「みゆき通りと並木通りの交差点が、族の中心だった」と指摘し、その理由を並木通りと晴海通りの交差点にあったテイジン・メンズ・ショップに求めている。石津謙介が帝人の顧問だった関係で、このショップは、当時事実上のVANモデルショップとなっており、「どうせ買うならテイメンでと、都内はもとより、地方からもお客が殺到した。・買った物の入ったVANの紙袋を大切に抱えた若者たちは、自慢げにあの一带を歩き回ったのではないか」。そして「みゆき族の特徴のひとつ、つんつるてんのズボンだが、これもテイメンと関係があるとにらんでいる。／当時、テイメンの高島店長は今で言うカリスマ。・彼はズボンを極端に短くはいた」（くろす、2001：107-108）。また、この頃有楽町側にある阪急にもVANショップが存在した²⁷⁾。そして、クルマで移動しない（できない）みゆき族にとって、まだ地下鉄網が整備されていないこの時期、六本木・原宿・青山・赤坂などへは通いづらかったというのも一因であろう（野地、1997）。

もちろん、こうした諸条件が直接的な理由なのだろうが、より視野を広げて考えてみれば、当時の「銀座」の置かれていた特殊な位置に思い当たる。吉見俊哉の『都市のドラマトゥルギー』では、

26) 66年11月25日号『週刊朝日』「くたばれ！原宿族：地元はカンカン連中はスイスイ」によれば、11月8日のフジテレビ『小川宏ショー』において、原宿地元民と原宿族との対決が放送され、「約十八分の放映中に視聴者からの電話が鳴りっぱなし」（124頁）だったという。また12月1日号『週刊大衆』「深夜の狂態“原宿族”の知能程度」によれば、「原宿族はTBSの『おはよう、ニッポン』でも取り上げたが、フジテレビは原宿族と地元民代表十数人を、一堂に集めてカミ合わせた」（26頁）。

27) ニコルのデザイナー松田光弘は、文化服装学院の「学生のころからよくデザイン画とかを賢三たちと一緒に売り込みに行っていた銀座の三愛が、当時すごいカッコいいお店だったんですよ。・そのへんがちょうど、みゆき族の発祥地になるんですけれど」「あの頃、ストリートファッションを取り上げる雑誌ってなかったから、（平凡パンチは）そういう面ではドンピシャの本でしたよね。・それまで、モデルさんがただ立ってる写真ばかりだったから、ちょうど、あの時期っていうのは日本でファッションが開き始めたときだから」と語っている（マガジンハウス、1996年：243-244）。

1920年前後の「浅草→銀座」と70年前後の「新宿→渋谷」という盛り場の移行が描かれているが、細かく見れば、60年代前半から後半にかけて「銀座→新宿」という転換があったのではないだろうか。戦前からの「銀ブラ」の伝統は薄れたにしろ、東京23区内ないし近郊に住むある階層以上の人々にとって銀座は、もっとも親しい盛り場であった。太陽族・みゆき族が、まださほど開けていなかった渋谷よりも、銀座を選んだのは当然といえよう。だが、若者文化の主役が、新宿に集まる「団塊の上京者たち」へと移行するにつれ、「流行の震源としての銀座」の時代は幕を閉じたのである。

【3】小括

以上、太陽族とみゆき族を中心にすえて、50年代から60年代にかけてのユース・サブカルチャーの動向をみてきた。そこから透けて見えるのは、まず一つにはクラスから世代へという重心の移動であろう。中産ないし有閑階級の生態を描いた『太陽の季節』が、映画館のシートに身を沈める以上の娯楽を享受できない層にも影響を及ぼし、また本来はアメリカ東海岸のエリートたちのファッションが、「銀座のこじき」とされた人々をさす言葉として転用されたように、若者たちが所属する文化は、その出身階層とはある程度無関係に、任意に選択されうるものとなっていった。経済的に恵まれた出自の六本木族メンバーが起用されていた映画や彼らの歌うロカビリーは、依然娯楽の中心にあった映画館やラジオ、レコード（プレイヤー）、さらにはテレビの普及によって、さまざまな階層の若者たちに受け容れられ、「若者向けの汎用文化（common culture）」ともいべき領域を切り開いていった。また『平凡パンチ』は、高級文化や親世代の大衆文化のみなら

ず、それ以前の週刊誌がつくりだしてきた「中間文化」をも、若者文化の隆盛をテコに突き崩していくことで、発行部数を伸ばしていった。

そしてみゆき族の場合、通りの名を冠したそれこそ「ストリート・スタイル」であった点も見逃せない。テッド・ポレマスは、単にファッションが上の階層から下へと“トリクル・ダウン”するだけではなく、現在ストリートからハイファッションへ、モデルたちが闊歩するキャットウォークへと“バブル・アップ”していると述べたが、石原兄弟のような偶像を持たないみゆき族にとって、原型のアイヴィーは上から滴り落ちてきたにしても、その着崩し方はあくまでもストリート発のものであった（Polhemus, 1994）。『平凡パンチ』にしても、その動きに追随ないし随伴するものでしかない。太陽族にしろみゆき族にしろ、その生成・拡大にメディアは大きな力を発揮——モラル・パニック視することも、結局そのフォーク・デビルスの増大・拡散に寄与している——していたが、それらはメディアが仕掛けたスタンピードというよりは、メディアが後追いせざる得ない現象であった²⁸⁾。

もちろんすべての若者が太陽族やみゆき族であったわけではない。だが、音楽やダンス、ファッションなど自己表現の手段を得はじめた（同世代人がいることを知った）若者たちは、既存の文化以外の何ものかを求め始めていた。もちろん、戦後教育を受けた世代が育ちつつあるにもかかわらず、依然旧来のジェンダー観は生き続けており、女性をセックスの客体としてしかみない太陽族や、ナンパの対象としてのみ求めるみゆき族など、いずれも男性中心のユース・サブカルチャーではあった。しかし、海外の同世代の若者たちと連動を強める60年代後半には、この点においてもまた新たな展開をみることになる²⁹⁾。

28) その後、マガジンハウスはさまざまな編集タイアップの仕組みを開発し、広告主と協働して流行を仕掛けていくことになる。現在のカタログ雑誌の原型をそこにみることも可能であろう（マガジンハウス、1985）。

29) ジェンダー観の点においても、太陽族とみゆき族の間には微妙な差異がある。みゆき族の場合、ナンパの際の主導権は女みゆき族にもあった。冒頭に挙げた「ヤング・ライフの開拓者《〇〇族》にみる戦後30年」には、「族を評価する基準は、彼らが何を残したかということによって決まる。太陽族は性を解放した。六本木族・原宿族は乱交を、アングラ族は新しい芸術を生んだ。そして、みゆき族は男を騙すテクニック。こうしてみると、やはり太陽族とみゆき族が戦後の2大族ですね」（風俗評論家・いそのえいたろう氏）。／だが、かつての太陽族たちのほとんどが今は青年実業家や政治家、みゆき族は銀座のクラブのママ。族のなれの果てともいべきか」（57頁）とある。

参考文献・引用文献

- アクロス編集室編 1995『ストリートファッション 1945-1995』パルコ出版
- 阿久悠 2000「ヒーローは1.5倍で走った」『60年安保・三池闘争1957-1960：石原裕次郎の時代』毎日新聞社
- 千村典生 2001『増補版 戦後ファッションストーリー1945-2000』平凡社
- Cohen, Stanley 1972 "Folk Devils and Moral Panics" Blackwell
- Davis, John 1990 "Youth and the Condition of Britain" Athlone
- 土井隆義 2003『<非行少年>の消滅』信山社
- 江藤文夫 1966『見る雑誌 する雑誌』平凡出版
- Fyvel, T. R. 1963 "The Insecure Offenders" Penguin Books
- Gillis, John 1981 "Youth and History", =1985北本正章訳『<若者>の社会史』新曜社
- 五島勉 1958『禁じられた地帯』知性社
- 池谷壽夫・小池直人編 1994『時代批判としての若者』同時代社
- 井上ひさし 1995『ベストセラーの戦後史1』文藝春秋
- 井上達彦・寺内タケシ 2003『新宿ACB：60年代ジャズ喫茶のヒーローたち』講談社
- 石原慎太郎 1957『太陽の季節』新潮文庫
1968『野蛮人のネクタイ』読売新聞社
1999『弟』幻冬舎
- 川島蓉子・小原直花 2002『おしゃれ消費ターゲット』幻冬舎
- 木村直恵 1998『<青年>の誕生』新曜社
- 北河賢三 2000『戦後の出発：文化運動・青年団・戦争未亡人』青木書店
- 北村三子 1998『青年と近代』世織書房
- くろすとしゆき 2001『アイビーの時代』河出書房新社
- マガジンハウス編 1985『創造の四十年』マガジンハウス
- 1996『平凡パンチの時代』マガジンハウス
- 水の江瀧子 1991『みんな裕ちゃんが好きだった』文園社
- 中山太郎 1956『日本若者史』日本文社
- 難波功士 2003「ユース・サブカルチャーズ研究における状況的パースペクティブ」『関西学院大学社会学部紀要』95
- NHK 放送世論調査所編 1982『図説戦後世論史第二版』日本放送出版協会
- 日本出版学会編 1996『出版の検証』文化通信社
- 西脇英夫 1976『アウトローの挽歌』白川書院
- 野地秩嘉 1997『キャンティ物語』幻冬舎
- Polhemus, Ted 1994 "Street Style" Thames and Hudson
- 坂田稔 1979『ユースカルチャー史』勁草書房
- 佐野眞一 2003『てっぺん野郎』講談社
- 佐野守 1970『近代日本青年集団史研究』御茶の水書房
- 佐藤忠男 1976『青春映画の系譜』秋田書店
1995『日本映画史3』岩波書店
- 佐藤嘉昭 1997『若者文化史』源流社
- 塩澤実信 1982「週刊誌時代の戦略」『“太陽族”の季節』学研
- 週刊誌研究会編 1958『週刊誌』三一書房
- 竹内洋 2000『一橋パワーの秘密』, 2000年12月号『中央公論』
2003『教養主義の没落』中公新書
- 竹内真一 1991『階級と世代：青年運動の選択』新日本出版社
- 谷和子・近藤益子 2003『黄金の銀座^{アシベ}ACB伝説』集英社
- 多仁照廣 2003『青年の世紀』同成社
- 寺田博編 2003『時代を創った編集者101』新書館
- 安田常雄 2003「教養からサブカルチャーへ」大門正克ほか編『戦後経験を生きる』吉川弘文館
- 吉見俊哉 1987『都市のドラマトルギー』弘文堂
2003「東アジアにおける『アメリカ』という日常意識」青木保ほか編『アジア新世紀5市場』岩波書店

Concerning Youth Subcultures in the Postwar Era Vol. 1: From Taiyo-zoku to Miyuki-zoku

ABSTRACT

'Taiyo-zoku (The Sun Tribe)' was the first major youth subculture in postwar era Japan. It was named after a novel "Taiyo-no-kisetsu (The Season of the Sun)" written by Ishihara Shintaro in 1955 and made into a movie in 1956. The novel and movie depicted the lifestyle of bourgeois or middle class young people. In the same year, many Taiyo-zoku movies were released and Shintaro's younger brother, Ishihara Yujiro, became one of the most popular movie stars. Many young people were influenced by Yujiro's style.

Later, in 1964, many male high teens gathered, chatted and tried to pick up girls around the Ginza Miyuki street corner in Tokyo. They were called the 'Miyuki-zoku'. Their clothes were a collage of Ivy Leaguers' fashion or European suit styles. Their fashion and behavior were boosted by "Heibon Punch", which was started as a young men's magazine, in particular for "The Dankai Generation" a.k.a. the Japanese baby boomers.

None of these zokus were long-lived. But they were not peripheral phenomena, because they reflected some important points of Japanese society in those days. Firstly, they symbolized the transition of a major factor of youth subculture, from class to generation. Secondly, they suggested the change of a major role of youth subculture, from Tokyo-born young to Tokyo-goers. Finally, they reveal the change in fashion trend-setting, from trickle-down to bubble-up. The former means that fashion trends are spread from the upper class to lower class. The latter means that trends are born in the street and then the fashion industry picks them up. In spite of these changes, those two zoku were male-centered. Even among young people, a new view of gender did not appear until the late '60s.

Key Words: youth subcultures, Taiyo-zoku, Miyuki-zoku